

術協力で西ジャワ州にできた優良種子馬鈴しょの増殖システムを、主産地を抱える他の州にも広げて、全国的な馬鈴しょ増産体制を確立したいと考えていて、専門家側も農林水産省とJICA本部、現地の大使館、JICA事務所、アンブレラ協力等の日本人専門家と連絡を取りながら、農業省に対して必要な助言を行っていた。西ジャワ州で始まったばかりの種いもづくりの現状、熱意はあっても技術や設備がない他州の現状から、農業省の全国展開構想を実現するためには克服すべき課題も多く、次にそれらの課題を整理してみたい。

(1) 西ジャワ州における増殖システムの強化
今後におけるこの国の種いもづくりで中核的役割を果たすことが期待されている西ジャワ州の増殖システムを、より強固なものにしていく必要がある。具体的な課題としては、

① 病虫害防除技術の高度化（採種環境の改善、ネコブセンチュウ防除技術等）

② 採種農家の技術改善

③ 増殖システム管理機能の強化（増殖・配布の企画調整、流通団体への指導強化）などがある。

(2) 他州の技術者養成

原原種・原種の増殖や種子検査ができる技術者を他州でも養成しなければならない。この場合、西ジャワ州の原原種農場が持つ研修機能が発揮されとしても、研修のみでは技術修得が難しいと思われるので、工夫が求められよう。企画調整や流通団体を指導する行政担当者の養成も併せて必要である。

(3) 他州における施設・機材の整備

全国的な増殖システムの中で、必要な圃場や施設・機材の整備が求められる。



以上のような課題を抱える状況のなかで、自力解決が難しいインドネシア政府は、日本の技術協力と円借款による施設等整備を要請しており、技術協力案件については昨年8月に事前調査、12月に長期調査が実施されている。これらの協力案件が実現し、インドネシア側の自助努力を加味したプロジェクトが効果的に実施されるならば、西ジャワ州で始まった種いも作りがやがて全国に広がり、この国の農家と農業の発展に大きく貢献するであろう。

アロールート

アロールートは、数種類の熱帯性草本で根茎・地下茎から可食でん粉が生産されるものの総称であって、代表的なものとしては「バーミユダアロールート」とよばれる *Marantaceae* 属の *Maranta arundinacea* がある。この種は西インド諸島で栽培され、黄白色で長さ25～50cm、径2～3cmの地下茎を生ずる。でん粉をとるにはこの地下茎を生育末期に収穫し、樹脂を多く含んでいて不快な味のする表皮を取り除きやすくするために水に浸し、のち叩いてでん粉を繊維質から離れやすくし、数回洗浄を繰り返してでん粉粒を洗い出す。水に含まれているでん粉を静置させるか、遠心分離機にかけてとり出し天日乾燥させたのち粉砕されるが、精製されたでん粉は85%の炭水化物と15%の水分を含み、他の成分の含量は少ない。

このでん粉はふっとうしている湯に混ぜるとゼリー状の塊にふくれ上る。たいへんに消化しやすく、プディングあるいはクッキーとして病人食あるいは幼児食として用いられる。しかし多くの場合は馬鈴しょ、サゴ、キャッサバなどのでん粉に混ぜて用いられる。